

ころげる(写真4)。争いごととは好まない。ラオス人、ベトナム人の混成部隊を率いてフランス軍と戦った元日本兵の記した本では、戦闘後の戦死者はベトナム人、行方不明者(逃亡者)はラオス人だったそうである。このようなのんびりした国も現在、高度経済成長中である。各国・機関の援助を受けながら道路改良や橋梁の建設、通信網の整備が進められている。水力発電所だけでも実施段階が10か所、計画段階が13か所にものぼっている。1994年4月には初のメコン河に架かる橋がビエンチャン近郊に開通し、目に見えて物が豊かになり観光客の姿が増えている。一方でそれまでは目に触れることのなかった物乞いが目立っており、空き巣の話も多くなってきている。開発の光と影を目の当たりに感じている。そんなに慌てて経済成長する必要のないのに、と考えるのは経済成長を終えた国から来たよそ者の無責任な意見なのだろうか。

図書紹介

◎笑うカイチュウ 寄生虫博士奮闘記 藤田紘一郎著 A5版 206pp. 講談社1994刊 定価1,500円

本誌のNo.13からNo.18にかけて、「熱帯医学の最近の話題」を寄稿して下さった熱帯医学の泰斗、藤田先生が書かれた寄生虫病についての読物である。本書によると、最近寄生虫病が大変な勢いで増えており、その背景に日本の国際化、とくに熱帯との往来が関係しているらしい。かってマラリアは言葉としてしか知られていなかったが、今日では、海外で活動している人々が感染し、日本に帰ってから発症することがあるという。ちなみに現在、マラリアにかかっている人は全人類の3.5%、1億7,700万人といわれる。このように再びわれわれの身近な問題となっている寄生虫病について、5章にわけて、分かりやすく解説されている。ユーモアに富んだ文章に、思わず引き込まれるように読み進みながら、人間を含めた動物の世界にも生態系があり、バランスさえとれていれば、寄生虫もしかるべき役割を果たしていることを知る。併せて、寄生虫問題が熱帯といかに関わりが深いかを知らされた。その意味からも熱帯にでかける人にはもちろん一読をお勧めしたいが、そうでなくとも面白くためになる読物である。なお、著者は東京医科歯科大学の教授で、熱帯医学と寄生虫学を専門とされており、本誌の前身、旧「熱帯林業」のNo.20からNo.72(最終号)まで「やさしい熱帯医学」を執筆されている。(浅川澄彦)